書　評・紹　介

C. Y. Cyrus Chu and Ruoh-Rong Yu,
Understanding Chinese Families: A Comparative Study of Taiwan and Southeast China,
Oxford University Press, 2010, xviii+297pp.

本書は，台湾海峡の両岸における中国人家族の比較研究である．著者の C. Y. Cyrus Chu（朱敬一）と Ruoh-Rong Yu（于若蓉）は，いずれも台湾の中央研究院で勤務する経済人口学者である．本書が依拠した「家族動態パネル調査」（Panel Study of Family Dynamics）は，1999年から台湾で，2004年からは福建省・浙江省・上海市でも行われてきた．調査項目は結婚・出生・夫婦関係・世代間関係など家族生活全般にわたり，Becker 以来の経済人口学的枠組で分析できるよう設計されている．

中国・台湾の経済発展と教育普及を解説した第 2 章に次いで，第 3 章では子夫婦からみた親との同居要因を分析している．夫方・妻方の比較では，中国より台湾の方が夫方への偏りが大きく，より伝統的である．また台湾では社会経済的地位の高さは同居を抑圧するが，中国ではそうした傾向はみられない．

第 4 章は出生行動の分析だが，「リネージ存続のために少なくともひとり息子が必要」への賛成は台湾の方が多く，ここでも中国より伝統的な価値観を保持している．操作変数法による教育年数の重回帰分析では，きょうだい数の効果は有意でなく，台湾・中国とも質－量の交互作用は激しくないとされる．

第 5 章は配偶者選択の分析である．台湾では見合い結婚が急減しているが，中国では禁止されているはずの職業的な仲媒人による紹介が依然として多い．学歴間通婚に対するログリニア分析によると，台湾では女子の上方婚（夫が妻より高学歴）が減少しているが，中国ではそうした趨勢は見られない．

儒教家族の特徴のひとつは男児選好の強さで，中国・台湾とも依然として出生性比の偏りが大きい．この問題に対し，本書では相続（第 7 章）や教育投資（第12章）に現れた男女格差を分析しており，理想・希望子ども数や選択的中絶は直接分析していない．性役割に関する態度は台湾の方が保守的だが，伝統的な男子のみの均分相続は中国が台湾を上回った．教育投資の性差の分析が示されるのは台湾のみで，教育における息子偏重は緩和されたが残っていることが示される．もっとも近年の台湾では女子の大学進学率の方が高く，本書が分析した1935～76年生まれより若いコーホートでは結論は変わるかもしれない．

儒教圏で最も重視された価値は「孝」であり，世代間関係は現在でも重要な研究課題である．第10章は同居する親子間の世帯内移転の分析で，過去 1 年間に親から移転を受けた割合は中国の方が，逆に親に移転を行った割合は台湾の方が多い．別居している親を含む分析によると，以前に経済的支援を受けた場合に恩返しをするというパターンは，妻の親に対してのみ当てはまった．同姓宗族内での支援は当然視されるが，異姓間では特異なのでお返しが必要という解釈で，儒教圏らしいパターンと言える．

第11章は別居子による訪問頻度と生前贈与の関係を分析している．欧米の研究では親が生前贈与をしてしまうと子は親に従う理由がなくなるとされるが，中国・台湾とも生前贈与済みの子夫婦の訪問頻度が最も高い．これは世代間関係が依然として緊密であることを示唆し，「孝」規範が近代化とともに消滅することはないとされる．

本書は家族の経済人口学理論で重視される普遍的な課題を，中国・台湾の民族的・歴史的特殊性を浮き彫りにしつつ洗練された手法で分析しており，優れた研究と言える．中国と台湾の比較は，異なる体制下での家族変動を比較する上で参考になる．（鈴木　透）